

夫れ弓矢の始りは、神代の時より用ひとかや、聞きつらん

矢入れを勒と名づけしは、其の中空にして、外に毛皮をかけたるは、粟の穂なぞに似たればとて、空穂とは言ひ伝ふ
 あら不思議やな、怪石裂けて石卵生じ、忽ち化して猿となる事は、人を教のたとへ草
 秋ふく風に笛の音は

草刈る童子もいづくかと、たよりし先はそれならで、妻をこひしと鹿笛に、へだてられたる溪川へ、散りし紅葉も時雨にぬれて、とけて
 嬉しき

雲の昏もしろや

〔二下り〕 早あら玉の春ぞ来る、ぞめき囃せし

花の中

草の薙にひく三味線の其の糸桜いとひなく

殿も家来も

ほのめく顔の、よい緋ぎくらの向島、土堤の錦も

花の空、竹屋竹屋と呼ぶ舟に、乗合せたる

猿廻し、こなたの岸へと

つきにけり

〔本調子・大名〕 太郎冠者あるか

〔太郎冠者〕 ハア御前に候

〔大名〕 あれに背負ふた逸物を、いづくへ伴ふなるか

尋ねて参り候へと

仰せに冠者は心得て、のうのう猿曳とまれとこそ、其の猿いづくへ引き候やと言ひければ

〔猿曳〕 賤の男はハアと手をつかへ、やつがれは此の辺に住む猿曳にて候が、今日もお旦那廻りを致さうと存じまする、
 心急げばやつがれは、そろりそろりと参らうか

〔太郎冠者〕 やれ待たうぞ猿曳、この方はかくれもない大名でおりやる、今日は春野の遊にて、弓矢をかたげ狩に参つたるが、あれに
 持たせたる鞆を、ないない毛皮にしようと思ふ折柄、よい猿に逢ふた、その猿の皮を申受けたしと

聞いて驚く猿曳が、猿の皮をお好みとな、そもやそも生きて居るものの、皮が何とてあげらるるで御座らうぞ

此の猿をもちまして、ひと日ひと日の命を送ります、是をあげましては翌より何の手業なし、こればかりはお許しと

詫ぶるに聞かぬ大名の、威を張りつめし強弓の、ひと矢にて射てと立ちかかる

〔猿曳〕 ああもし待つて下さりませ、猿の皮が御用ならば御手を下し、射殺されましては皮に疵がつき、爰に猿のひと打ちと申しまして、
 ひと打ちに命のうせる所が御座るによつて、殺して進ぜませう

太郎冠者も心得て、早う早うと進めけり

〔猿曳〕 またあるまじき殿の御意、畜類なれどもよう聞けよ、小猿の時より飼ひ育て、今更憂目を見る事は不憫な事ぞ
 今うつ程に草葉の蔭にても、恨と思ふて呉れるるなよ

あれ是非なしと振上ぐる鞭の下、まはる小猿のいちらしき

〔猿曳〕 あれあれ今のを御覧なされましたか、打殺さるる鞭とは知らで、船漕ぐ真似を仕りまするぞ

〔大名〕 何殺さると知らいで、芸をするとは不憫な事ぞ、やい太郎冠者、うつなと言へ言へ、連れて帰れと申せへと

聞いて喜ぶ猿曳が、唯有難しと伏拝み

此の上は御札に、猿にひと舞まはせませうと

声張上げ

〔二上り・祝言の舞〕 エエイ猿が参つてこなたの御知行、まざる目出たき能仕る

猿は山王まざる目出たき目出度さよ

てんより宝が降りくだつて、増生すれば綾や千反、錦千反唐織物よ

地には黄金の

花が咲き候、実に豊かなる時なれや

実に豊かなる時なれや

さらば我らは御暇と、元来し道へ帰らんと
 花を見捨てて帰る雁、空も高根の不二筑波、名にあふ隅田の春の夕景色をここにとどめけり、景色をここにとどめけり